

末黒野

すぐろの

4月号
(通巻908号)



冬晴

森清堯

堰 迂る水の白さや 姫椿
一語浮き一句浮かばせ 冬至風呂
躓きて踏み込む音や 霜柱
来訪の牧師の祈り 冬うらら
一病のある人ばかり 年忘
風音の硬さを強め 冬木立
持て余すことのみ 残り年の暮
富士の上の朝月 白く冴えにけり
冬晴の富上 讚ふるや 鳶の笛
元朝の目覚め 促す鴉声かな
神杉の秀より 零るる 初日かな
秀を競ふメタセコイアや 初日影

ローラー滑り台

岡野里子

日を纏ひ影華やげり 枯木の秀
綿虫や潮入川に 魚影なく
ローラーすべり台 寒風滑らせて
千成の吞りを 挽ぎる 冬至かな
蠟涙の乾ぶる 堂や霜枯るる
ぽんかんや凸凹 人生愛しめり
春待月横田めぐみの 写真展
春隣沖ゆく船の 模糊として
除夜の鐘渡る み空や星の数
走り根の踏まへる 大地年立てり
参道の並木の 瑞気初景色
初東風や海石を 洗ふ波しぶき

冬木の芽

黒滝志麻子

(顧問)

野仕舞の煙直ぐなる小春かな
冬芒そむき合ひつつもたれ合ひ
鐘楼へ立入り禁止冬木の芽
神苑の朝の日まとふ福寿草
新しき鈴に鈴の緒寒詣
三寒の更けゆく夜や深々と
鳥影の藁屋根よぎり四温晴
梅探る山ふところに古祠

甲矢集

配列は音順(月毎の循環)



柚子湯

石黒興平

雪吊りに引締まる苑夕明り
風のみ操車場跡冬北斗
大方の欲の失せたり冬至風呂
覚え無き傷のしみたる柚子湯かな
坪庭の木々の影受け白障子
鱸綱の撓み大きく寒に入る
鶏鳴につられ鳴く牛初明り
雲一朵無き初富士を拝みぬ
年酒くむ子のそれぞれに妻子かな
舞初やあふぎ槍とも酒盃とも

風花

菅野日出子

そつけなき猫のすり寄る寒さかな
大寺の深閑として除夜の鐘
綿虫や夕照まとひただよへり
衰へし日差し風花音もなし
風花やふれなば消ゆるはかなさよ
友の住む島に津波や寒苦鳥
杖ついて行き着く処恵方とし
三日早や墓地分譲のチラシなど
四日はやりハビリ行きの迎へ来て
疫病禍に訪ふ人もなし松の内

去年今年

森清信子

延暦寺の法灯ほのか冬ぬくし
ロープウェー湖まで続く冬もみぢ
山頂に嵩なす落葉門跡寺
白樺の肌の艶めく時雨かな
小問切れの主婦の自由や年の暮
どこから食まむ熱き鯛焼渡されて
極月や心の小箱整理して
悔ゆること十指に余り除夜の鐘
精いつばいの稚の初泣き頼もしく
菰卷やむず痒さうによぢる松

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



笹子鳴く

高木邦雄

去年今年運否天賦の吾が余生
神さぶや翁の舞ひの能始
遠富士の真白き嶺や淑気満つ
笹子鳴く峡の小径や朝日影
冬晴や小さき水屋の千社札
朝日差す籠に影や三十三才
終電の去り行く駅や寒昂

霜夜

齊藤マキ子

切り貼りの花の古りたる障子かな
我一人拾ふ霜夜の路線バス
明日あると思ふ霜夜の昆布茶かな
新雪を払ひて墓と話しけり
わが足を信じて一歩雪の朝
冬怒濤かもめ百羽を岸に置き
ごつごつと轍の乾く寒日和

薺打つ

長尾タイ

日蓮の慈悲の眼差し去年今年
初詣車道へ伸ぶる長き列
孫子等と抱負ひと言屠蘇祝ふ
髭面へ今年最後のお年玉
稜線に日矢の一閃初御空
神鈴の凍つる余韻や杜深き
薺打つリズムに妣の遠き声

あらたまの年

今村千年

疫病禍の世に存へて日向ぼこ
可惜夜はふたりでホットウイスキー
窓越しの富岳阿夫利嶺初山河
あらたまの年の国原美しき
息災をひとりひとりに屠蘇祝ふ
真ん中に猫の加はり初写真
校正の筆一本や初仕事

明の春

大川暉美

孫嫁すやひ孫待ちつつ毛糸編む
気紛れの風に追はれて落葉掃
涸川や耳鳴り絶えぬ終日
鑿跡の荒き仁王や寒牡丹
湯煙と香りたつぷり冬至風呂
法鼓一打響きわたりて明の春
塗椀の七草粥やみどりの香

冬うらら

太田良一

碧雲や百段登る恵方道
靈山は闇を作らず冬銀河
粉雪の舞ふ舞殿や巫女の舞
蕎麦すすする義士討入りの日なりけり
生命線見つつ足湯や冬うらら
切株を増やし裏山寒に入る
小鼓に散るを急げる枯葉かな

二十日正月

岡田史女

山嶺の豊旗雲や寒椿
小康の夫とをりけり去年今年
仰ぎ見る元朝の空ゆるぎなし
酒も良し句作もよろし初山河
一月の竹林風の棲みつけり
骨休みしてをり二十日正月は
探梅の丘をのぼれば海展け

鳩舎

小田嶋野笛

網の目の巴里の地図めく枯葉かな
風しづかオリオンしづか夜の鳩舎
俎板に余る真鱈や二頭身
鋤焼の好み豆腐派白滝派
雀来る去年の箒目乱さずに
惜命の咀嚼いつまで五万米の香
毒と言はれ薬と言うて年酒かな

元朝

加藤静江

光満つ四方の輝き年新た
天を突く銀光り冬木の芽
元朝の瑕瑾なき空果てしなく
黒竹の細きしなりや雪催
冬菊の白に緊りのなかりけり
冬うらら眼下に鎮む相模湾
ここよりは登り坂なり冬紅葉



青炎集

森清堯選



横浜

和田 慈子

横浜

池 乘恵美子

古民家の土間の火の色炉の煙
年輪をさらす切株山眠る
芙蓉峰のぞく睦月やビルの間
高塔の光る玻璃窓初日の出
世話役のなり手皆無や雪催ひ
農協の花壇整ひ春を待つ

静かなる影を湖面に枯桜
鐘一打一禍一掃除夜詣
一年をからりと丸め古暦
古日記知らで過ぎたる恩いくつ
手捻りの考のぬくもり寒椿
初東風や沖へ水脈引く漁船

川崎

滋野 暁

大網白里

亀 卦川 菊枝

小春日や媪の復習ふハーモニカ
小網代の森枯葦の孤を描き
着ぶくれの悪しき包丁捌きかな
枯木星小巻の一人芝居果て
書初や春の一字の墨の艶
いかのぼり多摩の河原の茜色

清韻を奏つる銀河去年今年
初日の出滄海永遠にと祈りけり
潮の香の初風に立ち襟正す
吾子五十のリモート会議初仕事
雪しづる音に抱かるる心地かな
晴着の子歩を小刻みの雪の道

鎌倉

丸山 千穂子

東大和

谷 口 律子

茶の花のたぐる日差しや禅の寺
山裾の落葉に埋もれ羅漢像
枯芙蓉のなほ枯色や谷戸の雨
夕暮の冬菊仄と茎あげて
冬の雨湖に舫へるスワン舟
襟巻に顔を埋めて路地の闇

擦れ違ひざまの寒気や日の暮れて
女か男か分かず目深の毛糸帽
あれこれとまた買出しや年用意
除夜の鐘撞くや鳥肌立つ余韻
二歩ごとの白線跨ぎ初詣
門柱や拳二つの雪だるま

三鷹

小林 清彦

横浜

岩 上 行雄

紙コップ仕事納の事務机
仕舞湯に忘我貧り除夜の鐘
おどおどと渡る世間やマスク越し
黙りを極め込むをとこ冬の月
大人とは臍嚙みつつや霜柱
日溜の居場所求めて冬の蜂

球根を放り出したり霜柱
虎描きて湧きくる元氣賀状書き
子や孫に見立て戯る柚子湯して
林間のきはだつ日矢の淑気かな
数の子や嚙みある音に乗る調子
初風の親に口出す翁かな

横浜

大内 由紀

新宿

浅 岡 麻 實

冬ざるる黒姫山や一茶の忌
変更の通信句会蕪汁
九谷焼のコーヒーカップ雪景色
殊更に古きバーの灯淑気満つ
駅伝の応援の旗初電車
羽撃きの音の密やか春を待つ

八十歳は重き響きや今朝の冬
何なくも庭一面の散紅葉
灰汁抜くる八十歳や煮大根
蕪杏を用の美と愛つ豊かさよ
五万米炒る十七文字を探しつつ
未熟児の八十歳や屠蘇の酔ひ

耕 土 集

岡野 里子



年男二男に虎の張り子買ふ

横浜 岩崎 藍

初孫の手合はず仕草初詣

雲間より日の射す川面鴨の陣
寒波来や街の明かりの尖りをり

横浜 鈴木 英雄

埋火や竹馬の友の召されし夜
松の枝や雪払ひたる夜の余生

束の間を心真白に雪遊び

渋滞の尾灯の列や大晦日
正月の風に乗するや父子の凧
日溜りを辿るひと日や梅探り

豚汁や下仁田ねぎをたつぷりと

横浜 古宇田伸子

小春日や幼の足に風立ちぬ

横浜 伊藤 鴉

垣の間我が家の顔の実千両

新年や子らの笑顔のふゆる世に

笑ひ声聞こゆるやうや年賀状

初ラジオ邦楽の音に父しのぶ

雪しまく腓の太き仁王像
目覚むれば兎にも角にも初日浴ぶ
酒酌むや多国籍なる節料理
足腰の酒の重さや初稽古

ありがたうを習ひとすなり年新た

横浜 平田 きみ

先づは手に温もりきたり玉子酒

横浜 小林 拓路

鳥瞰の富士の裾野や淑気満つ

芦ノ湖へ草駄天駆くる二日かな

飽食を気付かぬ振りや三が日

フル稼働の野菜工場寒の入

影薄き臘梅の数茶店裏
雪降るや薄暮にゆるる灯の一つ
可惜夜の冬満月やかむさびて
初空を渡るゴンドラみなど街

努力賞受賞作品抄

振 花

岡 美 智 子

靴ひもを結びなほして冬
袖口をぐぐつと伸ばす余寒
雨に香を薄めて路地の沈
花の雨ゆるりと時は流れを
そら豆の莢剥く指の弾みけり
振花や螺旋の先の大宇宙
薫風や鳩客となる鶴見線
川風に揺れて向きかへ青芒
釣り人の皆無口なり行行子
ボランティアの赤き鉢巻梅雨
ビル影のゆらりゆらりの炎暑
八月は悲しき月ぞラジオ聞
待てど来ぬ投句の手紙秋暮
鯉跳ねて水面の月の崩れけり
つま立ちて拭くガラス窓冬日和

桐の秋

谷口律子

雛納め老いには高き天袋
 列なれる自転車のは高き天袋
 泡吸るウインナーの等蝸の紐
 鯨波めきさやぐ青葉や古戦場
 夏空を跳ぶ楽しさをよ水たまり
 家の者出でてひとり居遠き雷
 考に似る風貌の僧孟蘭盆会
 単線や草の実落ちてゐる座席
 世渡りの下手なるまんま赤まんま
 転のなく生きて結へと桐の秋
 十五夜や二円切手を貼つてをり
 表見せ裏見せ降り来朴落葉
 亡き人のメーブル消さずに年
 花の名を立てて春待つ花壇か
 時の気に怖ぢつ向かひつつ年の豆

明日を待つ

東小蘭美千代

梅の里蓄列ねて明日を待つ
 竹の葉のさゆらぐ影や春障子
 菩提寺の艶めく蕓の春雨
 澆刺と岬廻駆なくる春の駒
 切岸の影絵となりて春の駒
 岬鼻へひと筋の道棕櫚の花
 滝一条風と光と喚声と
 入相の坪庭抜く素風かな
 惜別の花蕊の涙隠せり秋扇
 彼岸花の香まよ今何処
 月今宵竹馬の友よ今何処
 柀の花の香まよ今何処
 威勢の良くと太腕黒鮪
 漆黒の富士然と寒寒
 憂世に変はらぬ光寒北斗

桃の花

沼崎千枝

啓蟄や子規の遊びし野球場
 ひらがなのなまえかけたね桃の花
 菜の花へ電車の一両入り深き雲
 郭公のリズムの途切れ深き雲
 筒鳥や椀の木の高き男坂
 ほととぎす山の鼻より鳩待へ
 蠅叩く執念深さ生れ付き
 掃苔や故郷離れて半世紀
 草の花石碑の文字の崩れをり
 秋蝶の花石の手を歩き天守跡
 山歩き紅葉はホスピス選びけり
 小春空の友はホスピス選りけり
 了解とのみメーブルや日の短か
 自己流のブイヤーベルスや冬の
 仕事ロボットの掃除機の出番

山の湯

丸山千穂子

路の臺岸辺の土に苞を解き
 初蝶の来肩を貸したる馬頭尊
 天空の朝より晴るる帰雁かな
 枝道の海のへ展けて浜の大根
 夕桜の小雨に烟る谷戸の春の
 山の湯の闇の深さや春の冷月
 岬山の弾薬庫跡若葉冷
 蟬声の昂ぶり谷戸の行きどまり
 多聞天足下に邪鬼の酷暑かな
 渡し場にこつこつと杖水の秋
 仏足石の渦紋の光露の朝
 蚕町の灯影またたく良夜かな
 古民家の影低き庇や秋桜
 柚道や落葉踏む音するばかり
 花石路の照り戻りして躰かり

雀のお宿

渡辺富士子

子も孫も男の子ばかりや古雛
 煩悩と布施の間や彼岸西風
 言寿の飛び交ふ窓辺朝桜
 明鳥夢の続きは春の色
 濃く淡く二段構へや谷若葉
 薔薇の園思ひ思ひの自己主張
 梔子やかくし事など出来ませぬ
 常念岳を左の方へ蕎麦の花
 葛の花寄るべなき身の置きどころ
 冬瓜や人と和すこと上手くなり
 男と女など言はぬ仲今年酒
 トタン屋根の雀のお宿冬落暉
 湧き出づる富士の伏流冬苺
 一人居のビルに囲まれ初御空
 高層のビルに囲まれ初御空

時系列

板谷俊武

剪定や鉄の音の潔く
 地下足袋の無念無想や麦を踏む
 根掛りの日がな一日眼張釣り
 黒文字や春の茶席の黄味時雨
 花散るや蜜吸ふ鳥の狼籍に
 潮干狩未練を探る足裏かな
 こどももの日柱のきずの時系列
 遠雷や棺に納むる野球帽
 谷戸を過ぎ直す靴紐登山口
 特急の掻き混ぜて去る炎暑かな
 鯛群れ一糸乱れぬ急ターナー
 薄原漕ぐや二腕の腕ひりひりと
 置竿や不遜な貌の鯨二匹
 ハーレーの不遜な貌の鯨二匹
 乗り過ぎす仕事納めの微醺かな

葉 桜

上野 静子

金縷梅やだれかれ参る地藏尊
 リハビリのかかる立ち居や亀鳴ける
 ちりぢりの子ら三楹の花明かり
 きびきびと若きナースや初燕
 菜の花や蛇行のひかる河津川
 配膳へ芭蕉の一句花祭
 日和よき葉桜の下退院す
 朝蟬や何か急かる今日のこ
 東雲の一朵へかかき秋のこ
 今朝の秋池盛り上がり太き鯉
 一陣の風に乗り来ぬ秋あかね
 盛り上がるピンゴの声や秋高し
 草枯れた沈む水音拾ひけり
 冬ざれや庭に鉢の英気硬き音
 さ緑の七草粥の英気硬き音

本の徴

小林 清彦

啓蟄や世間の風に馴染まむと
 回合の残像追ひて花遍路
 薬や幕引くころと言ひ聞かせ
 知らぬこと知らずのままや花は葉に
 運命の軽重在るや柳絮飛ぶ
 ひとことも言はぬ別れや五月雨る
 拭ひても漂ふ昭和本の徴
 ででむしや行くべき途をとりあぐね
 じやんけんの紙ばかりなるおけらかな
 真相は腹に納めお落し文
 授かれる天寿や蟬の仰臥して
 向日葵や天動説にこだはりて
 過去未来の行き所無しがる虫
 隙間風換気要らずの夫婦仲
 煮えきらぬ漢の食らふおでんかな

苔の花

田中春江

潮入りの名残りの池や亀の鳴く
 いただくる饗なるものや木の芽煮る
 逝く春や剥落しるき仁王象
 養花天真昼を灯す物見船
 コロポツクルの靈を碧に苔の花
 吉見百穴一隅照らす苔の花
 児童画のごとき菜園ミニトマト
 桃色のキツチン秤梅漬くる
 校門は城門なりき蔦青葉
 躓きも転びもせぬ日飛蝗とぶ
 かむなびの山路蓼々鉦叩
 月光や蛇を眠らすす天守台
 極月や万歩あゆめぬ万歩計
 エンディングノート埋めゆく二日かな
 双手あげ仏もなさを初笑

四季を歩く

布施由岐子

主なき荒地の明かり梅真白
 杉のあと黄水仙植う村おこし
 露天風呂呂は一人一船夕霞
 延々と歩く緑地や走り梅雨
 笹の子の身や幾倍の皮の山
 姿こそ見えね野太き滝の声
 翠巒や谷這ひのぼる雲の波
 霊峰の赫赫としほて大山西日
 遙かなる檜よ穂高よ登山杖
 単線の電車の揺れや合歓の花
 探しぬる休み処や秋の蝶
 秋澄むやひとかたまりの八ヶ岳
 屯す猿まるとかたまりの冬近
 甘き香の落葉の嵩や冬木山
 縋るものへ紅残し冬紅葉

初嵐

六崎正善

朝 畦 秋 交 吹 登 蚊 開 雲 山 朝 頂 蒼 摘 紅
 礼 道 高 は き 校 遣 け 割 里 桜 へ 天 草 梅
 の は し り 上 児 の 放 つ の の や や
 声 縦 石 て ぐ の や つ て 目 石 燧 突 き 海 梢
 は 横 碑 離 る 傘 の 畑 の 玻 零 る 覚 礎 き 峡 渡
 高 斜 に ゆ 士 の 行 小 屋 の 山 の 五 八 早 し 有 百 丁 木 の 芽 木 の 芽 期 船
 々 曼 珠 開 秋 の 蟬 嵐 入 る 飯 闇 桜 道 段 芽 晴 月
 初 仕 事